

プロスポーツと社会貢献活動が双方にもたらすメリットと今後の活動に関する研究
—ピンクリボン運動を事例にして—
A study of benefits both professional sports and social contributive activities and activities in future
-The case of Pink Ribbon Campaign-

1K08B206-4 村上 由佳
指導教員 主査 間野 義之先生 副査 原田 宗彦先生

1. 研究背景

独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センターによると、いま、日本人女性の16人に1人が生涯の間に乳がんにかかると言われており、その罹患率は年々増加している。乳がんは、早期発見・早期治療が非常に大切である。早期に発見して治療すれば約9割以上が治る病気であり、早期発見・早期治療によって治る可能性が他部位のがんよりも高い。そのため、乳がんに対する啓発を進めることは、乳がんの早期発見・早期治療につながり、生存率を高めると考えられている。

乳がんの早期発見・早期治療の啓発運動に、ピンクリボン運動がある。CSR活動の1つとしてピンクリボン運動に取り組んでいる企業も多数あり、いまやピンクリボン運動への取り組みは社会貢献活動の1つになっている。これはスポーツ界にも広がっており、ピンクリボン運動に関係したイベントやキャンペーンを実施するチームが次々に見られるようになった。スポーツはピンクリボン運動の普及に貢献するだけでなく、そのチームに対しても何らかのメリットが期待できるのではないかと考える。

2. 研究目的

プロスポーツのピンクリボン運動介入の事例を調べ、双方にもたらされるメリットや今後期待される活動を考察することを目的とする。

3. 研究方法

本研究では、社団法人日本プロ野球機構の球団と日本プロサッカーリーグのクラブでピンクリボン運動を支援する活動を行っているチームを調べ、その事例をまとめる。また、アメリカのナショナルフットボールリーグとメジャーリーグベースボールの活動事例を取り上げる。

4. 結果

日本プロ野球界では12球団中5球団、Jリーグでは30クラブ中11クラブがピンクリボン運動に協力したイベントを開催し、関連オリジナルグッズのチャリティー販売の収益の一部を寄付したり、

マンモグラフィ検診のプレゼントや自己検診学習コーナーを設置したりと、その活動内容はさまざまである。

アメリカはピンクリボン運動発祥の地ということもあり、日本よりもピンクリボン運動の普及が進んでいる。ピンクリボン運動に対する取り組みも活発で、スポーツのリーグ全体で大々的に協力している印象を受けた。

日本におけるピンクリボン運動へのスポーツの介入に関する研究は事例が少ない。先行研究によると、スポーツ参加型啓発活動は乳がん検診受診行動を改善する可能性が示唆されている。

5. 考察

どのチームもNPO法人や地方自治体、スポンサーなど他の団体と連携した活動を行っていることから、地域社会もしくはスポンサーとの連携は不可欠であることが分かる。また、イベントの回数を重ねるごとにその内容は充実したものになっており、活動の注目度の高さがうかがえる。

スポーツのピンクリボン運動介入には、乳がんに対する人々の興味・関心を高めるだけでなく、そのチームに対する女性の興味・関心をひきつけ、新たなスポーツファン獲得のきっかけになると考えられる。

6. 結論

現在、日本の医療技術は急速に進歩を遂げている。病気の予防や早期発見・早期治療のためには、医療技術の進歩だけでなく私たち国民が病気に対してより興味・関心を持つなどの努力が必要であるとともに、正確な知識・情報の取得やそれらを手に入れることができる環境の整備が求められる。

プロスポーツチームと社会貢献活動の今後の可能性としては、切り離すことができない関係となり、今まで以上に啓発活動が普及するだけでなく、これまではあまり取り上げられる機会がなく認知度の低かったコースにも注目が集まっていくだろう。また、社会貢献運動には継続性が求められる。1度始めた活動に工夫を重ね、いかに継続させ、発展させることができるかが今後の課題である。